

&lt;翻 訳&gt;

## トーマス・ムルナー：阿呆祓い (7)

名古屋初期新高ドイツ語研究会訳

(代表 精園修三)

ここに翻訳したのは 1512 年に刊行された Thomas Murner: Die Narrenbeschwörung の第 40 章から第 47 章までである (第 39 章までは『中京大学教養論叢』第 38 巻第 4 号, 第 39 巻第 2 号, 第 4 号, 第 40 巻第 2 号, 第 4 号, 第 41 巻第 2 号に所載)。使用テキストは Franz Schultz 編集のムルナー全集 Thomas Murners Deutsche Schriften mit dem Holzschnitten der Erstdrucke の第 2 巻 (M. Spanier 編, Walter de Gruyter 1926 年刊) を使用し, 適宜 Josef Kürschner 編集の Deutsche National-Litteratur Historisch-kritische Ausgabe 第 17 巻第 1 分冊 (G. Balke 編, 三修社版 1973 年) を参照した。また戦前のレクラム版でこのテキストの現代語訳 (Universal-Bibliothek 2041-2043, Die Narrenbeschwörung von Thomas Murner. Erneut und erläutert von Karl Pannier. 1884 Leipzig) を参考にした。聖書に関しては『聖書新共同訳』(日本聖書協会 1987 年版) に拠った。

この翻訳は, 名古屋初期新高ドイツ語研究会が 1994 年 6 月から輪読会のテキストとして使用し, 各章をメンバーが分担して訳していたものを, 今回再度共同で検討修正したものである。但し, 解釈の一致をみない箇所についてはその章の担当者に最終判断を任せた。2000 年 4 月現在のメンバーはつぎのとおりである。青木一行 (名城大), 丑田弘忍 (中京大), 工藤康弘 (三重大), 精園修三 (中京大), 橋本忠欣 (福井大), 松尾誠之 (愛知県立大), 森昌弘 (名大名誉教授), 山田やす子 (皇学館大) (以上ア

イウエオ順)。

訳分担表

第四十章 精園

第四十一章 橋本

第四十二章 森

第四十三章 山田

第四十四章 青木

第四十五章 松尾

第四十六章 工藤

第四十七章 精園

第四十章<sup>(1)</sup> 狼の説教

神について<sup>が</sup>鶯に説教する一方で、  
その鶯に密かに危害を加える奴、  
そ奴が狼同様甘い言葉を口にするのは、  
鶯を手中に収めるまでだ。

鶯にはある家訓がある、  
狼がやって来ても、  
その言葉を信じるな、  
狼が来るのは、物を奪うためだけなのだからという家訓が。

5 これを今日まで  
狼は鶯に忘れさせることができない。  
鶯はこの家訓を固く守って、  
狼の言葉を信じるような鶯は一羽もない。  
しかし狼は別の策を考えだした、

10 ミサを歌い、  
説教をはじめて、こう言った、  
鶯よ、自分と自分の仲間を  
<sup>とが</sup>咎めないで欲しい、  
何故なら、自分たちは皆司祭になろうとしているのだから、  
と。

15 さて、狼が司祭になると、  
それは鶯皆の知るところとなり、  
教会へやって来て、  
素晴らしい説教を聞いていた、  
すると狼が門を下ろした。

20 だから鶯は出るに出られず、  
やがて狼に呑み込まれることになる。

- 聞こえのいい言葉でもって  
狼は鶯鳥すべてを手中に収めた。  
気の毒なのは、憐れな鶯鳥で、  
25 小屋のなかで狼に見張られている。  
今この世では  
皇帝とか王に、  
そうでなければ国の支配者になりたがる奴は、  
まやかしを工夫し、  
30 狼同様ずる賢い説教をせねばならぬ、  
すると門がそ奴にむかって開かれる、  
いかがわしい美辞麗句がならべられるのも、  
そ奴が鶯鳥を目的地へ運ぶまでだ。  
しかし私がその美辞麗句をここで教える必要はない、  
35 領主やお偉方はそれをよくご存知だ。  
あの連中は選ばれるまでは  
たいへんお行儀よく振る舞い、  
まるで本物の天使であるかのように、  
やさしく羊の毛を刈る。  
40 その連中が権力の座につくと、  
別人に生まれ変わる。  
その後どの市民もこう言って  
嘆く、「ああ、困ったことだ、  
わが殿が暴君だとは、思いもしなかった。  
45 だって、あの方はやさしい言葉を口になさっていたのだから。」  
というのも、殿は狼からその言葉を、  
手のひらの返し方を学んだのだ。  
それから殿は役人を思いのままに任命する、  
表向きは役人の声を聞くためだ。  
50 そんな役人を大勢任命し、  
その役人とやりたい放題のことをやる。

- 「殿、それはあんまりです」と言われようものなら、  
何をこん畜生、糞ったれ、阿呆、と罵り、  
自分は何もかも人の意見をきいてやった、  
55 役人どもに尋ね廻らせた、と言う。  
その役人どもはあらかじめ事情を呑み込んでいて、  
殿と示し合わせていたのだ。  
言われたとおりにしないと首だ、  
という役人どもの声が殿の手元に集められている。  
60 だからこんなの八百長で、  
しばしば脱線したり、逆走したりする。――  
高位聖職者たちがやっていることも  
世俗のお偉方がやったのと同じだ。  
下心を隠して羊の毛を刈るのも、  
65 高位聖職者に選ばれて、  
鶯を小屋に追い込むまでだ。  
その後はすべてを閉じ込め、  
鶯を改造し、  
別のものに作りかえ、  
70 皮を剥ぎ、削ぎ、毛を筆<sup>むし</sup>って、責めたてるが、  
物事の本質について自分自身何も分かっていないのだ。  
高位聖職者たちは鶯が宗教的に生きることを教えようとし、  
狼と歩調を合わせて、  
鶯に守るべきことを教えたがる。  
75 その鶯が煮られ、焼かれようとも、  
宗教的な油は一滴たりとも  
出てこないのは確実だ。  
高位聖職者がやっていることといえば、  
小屋のなかの鶯を苦しめ、悩まし、  
80 思いのままに危害を加え、  
がつがつむさぼり食い、神について説教することだけだ。

いつの時代でもそうなのだが、  
 狼が祝福を与えるまで、  
 我々憐れな鶯鳥は危害を加えられる。

85           それ故、お偉方の言葉は信用するな、  
 連中はいとも簡単に豹変したからだ。

そのやり方は狼から学んだのだ。

レハブアム<sup>(2)</sup>が王になると、

民衆は、先代のソロモン王には苦しめられた、

90           レハブアムが父と同じことをするならば、

自分たちは我慢できない、

と強く訴えた。

それ故、王になされた真面目な請願は、

王が現状維持を望んだら、

95           聞き容れられるべきであった。

ところがレハブアムは愚かな人々の言葉に従い、

当初民衆と一戦交えようとした。

それ故、レハブアムの王国はその存命中に滅びた。

#### 注

(1) この章は言葉巧みに出世し、その地位を悪用する人々に対する批判である。

(2) ソロモン王の長子。ソロモンの死後、統一王国は分裂し、南王国ユダの王 (B.C.922-915 年在位) となる。北王国イスラエルの王ヤロブアムと何度も戦い、前 918 年頃にはエジプト王シシャクに攻め込まれた。旧約聖書、列王記上 12, 1-24, および 14, 21-31 を参照。

#### 第四十一章<sup>(1)</sup> 鶏に尻尾をつけること<sup>(2)</sup>

鶏に尻尾をつけるよな

阿呆は全く見かけなくとも、

尻尾を高く持ち上げることは

鶏にとってごく当たり前のことだ。

必要もないのに敢えて

鶏の尻尾をつけてやるような人を、  
阿呆だと私は思っている。

こんなことは鶏自身もっと見事に、  
5 尻尾を持ち上げているからだ。

だから私が愚行というのは、  
手を貸さなくても自ずとうまくいくことを、  
敢えて手を貸す奴は阿呆だということだ。  
どんなふうに墓を造ってもらい、

10 大金を使ったものか、  
多くの人たちが大いに気を使っている、  
——まるでお金をかけるだけ自分が救われるかのようだ。——  
自分の肉体を埋葬させる

贅沢な場所を造るために。

15 粗末な墓だからといって、これまで  
貧しい人々に不利になることがなかったように、  
高価な墓が金持たちに役に立たないことを、  
しかと覚えておけ。

事前に苦しみから免れることなどないだろう。

20 墓を造ることは生きている者たちの慰めなのだ。  
死後自分がどの様に埋葬されるか、

人は心配や不安や悩みをたんまり抱えている。  
人が心配など全くしなくとも、

肉体は安らぎの場所を見つけるし、  
25 蓋がなくても、

天が蓋となり、

墓だということに変わりはない。

それにもかかわらず鶏に尻尾をつけさせような阿呆をして、  
自分の墓のことや、さらには会葬のことで

30 大変心配をしなければならないのだ。

こんな男は墓石を造らせ、

子犬<sup>③</sup>が墓石の足下において、

いつも墓を守っていなければならない。

魂が何処に行くかは誰にも分かりはしない、

35 自分の肉体だけを守っていなければならない訳だ。

魂が何処へ赴こうと、私たちにとって

特別の関心が沢山あるわけではない、

魂は当然いけるところへ行くがよい。

鶏に紐を編みつけるような愚行をしている

40 ご婦人方がまだ沢山いる。

自分の娘たちに罪を犯すことを教え、

鶏に尻尾をつけることを教える。

娘たちにこれ見よがしに身を装うことを教え、

娘たちは衣服を整え、化粧をし、身を飾ることができる。

45 然るべき歩き方をし、

お上品なお辞儀をし、

まわりに目を配り、色目を使い、

胸当てから胸を見せびらかし、

唇を曲げ口元を引き締め、

50 きちんと合わせ、

自分を気に入ってくれる

お金持ちの若君を、見つけられないかと、

手首につけた金の腕輪をあちらこちらと

男たちに向ける術を、母親たちは教える。

55 お前の方がしないでおかなければならないことを

どうして自分の娘に教える必要があるのか。

娘たちはこんなことをあまりにも沢山知りすぎているだけだ。

こんなことは誰も娘に教えなくても、

娘はひとりでに学び、

60 平気で恥知らずなことをしでかす。



ふしだらと言われて、

母親があれこれ指示するのは後のことだ。

どうしてお前は娘に、無益なことを教えるのか。

娘がお前や父親に可愛くなるより先に、

65 娘は性を体験してしまうであろう。

神の掟、名誉、美德よりも

今では悪が行われがちだ。

今や若い連中はみな不良で、

嘘をつくことしかできない。

70 私が気づかれないようにしていることを

若い連中は堂々とやっている。

悪に染まって、

お前が私に対して阻止した方がよいような

悪の見本を持ち出してくるような娘たちに、

75 今更何か教えようというのなら、

自分がかつて悪をしでかしたことは、

その際お前の授業料ということになるろう。

帯に尻尾をつけるような別の愚行をも目にする。

娘や小さな子供たちを

80 犯し、おかまいなく墮落させ、

さもなければお金で誘惑する。

お前から教わったことを

哀れな子供たちは生きている間、

どの土地でもやり続けるのだ。

85 お前がその原因をつくり、

阿呆の始まりはお前なのだ。

お前が悪行をしでかし、

哀れな娘たちをだめにし、

婆さんになってもまだ残っているような

90 気紛れな教えを垂れたことに対して、

お前はどの様に弁護してもらおうと言うのか。  
若い娘たちは今やふらふら歩き回っている。

裁判官は誰もこのことを知ろうとしない。  
お前たちが罰しなくても、神様に間違いはない。

95       こんな悪童たちは杭刺しの刑で死刑だ、  
それでも外国にいて  
刑を免れる連中も多くいる、  
其奴らには鶏に尻尾をつけているようなことを私はしてやる。

#### 注

- (1) この章は無益な仕事をしたり、悪やふしだらをけしかけるような行為を批判している。
- (2) 「鶏に尻尾をつける」とは、鶏にさらに尻尾をつける必要などないことから、見せかけだけの阿呆の上塗りの比喻。
- (3) 墓石に彫られたもの。

### 第四十二章<sup>(1)</sup> 小さな馬を走らせる<sup>(2)</sup> こと

贈り物や<sup>まいない</sup> 賄をすれば

この小馬は実に遠くまで走る。

お前が手ぶらで来たら

馬はここから動かさない。

物を贈り、賄をし、親切そうに頼めば

人を動かせることは、

今私には不思議ではない。

馬も同じで、

5 小さな馬に物をやれば、速く走る。

やらなければ一步も動かぬだろう。

今ではそれが世の習いで、

どんなものでも金で買える。

- 神様が自ら今この世に来られても、  
10 お金がなければ賓客ではなく、  
誰も家に引き留めないで  
棍棒で叩き出すだろう。  
秘蹟，洗礼と同様に  
聖職禄は大きな買い物で、  
15 どうしたら聖職禄が得られるかと、  
多く的人是心の安まることがない。  
本当に聖職禄一つのために  
どれだけやっても十分ではない。  
聖職禄を授けてくれる人には、  
20 前もって財布を寄贈せねばならぬ。  
私たちは幸福と救いを買うのだ。  
今金で買えぬものがあたら言ってくれ。  
美德，名誉，尊敬と  
あらゆるものを聖職者が売っている。  
25 私たちの罪にかかわる後悔と苦しみ、  
そのすべてが売り物で、  
恩寵，名誉，寵愛も売られている。  
それはイエス・キリストの命と引き替えに  
無償で受け取ったもので、  
30 無償で施さねばならぬものだ。  
昔，学者が聖職に就いていて、  
聖書の権威であった時、  
学者はすぐに教義と人格で、  
キリスト教徒を導かねばならなかった。  
35 お前がろばのような阿呆で、  
英知が全く欠けていて、  
らばの手入れをしたり，畜舎を守って  
錠をかけることしかできなくても、

今ではすぐに聖職禄を得るに違いない。

- 40           それはお前が雑事を忠実に勤めたからだ。  
これが哀れなもキリスト教徒に損害を与えている。  
          キリスト教の教えを伝え、説教せねばならぬのに、  
私に教えられるお前の知っていることは、  
          お前のろばがどこで荷軽くするかということだ。

- 45 銀貨があればどんなことでもできるので、  
          贈り物は当たり前になり、  
どんなものでも金額で考えられて、  
          絞首台までも金がある。

使徒言行録に見られるが<sup>(3)</sup>、

- 50           シモンが厳しく非難されたのは、  
現世の黄金と引き換えに  
          神の賜物たまものを買おうとしたからだ。  
シモンはそんな修道士を沢山あとに残し、  
          修道院、国々、街道にあふれている。

- 55 今修道院に入ろうとすれば、  
          贈り物をしなければ入れない。  
金さえあれば  
          出世もできる。

不思議な話だが、

- 60           私は清貧を誓っても、  
金貨や黄金は持たねばならぬ。  
          さもないと人に軽んぜられる。  
四旬節に告解をせねばならないと、  
          私は財布に手を伸ばさねばならぬ。

- 65 聖体を受け取りに行かねばならない時、  
          「まずこちらに渡せ」と言われる。  
私が叙階に行こうとすると、  
          文書を作ってもらわねばならず、

それには印章を十分に湿らさねばならぬ<sup>(4)</sup>。

70

聖職者がするのは金勘定だけだ。

今では能力で叙階される人は稀で、

自分の人となりでそれを手に入れても、

歌ったり、朗読することができて、

哀れなキリスト教徒に

75

説教し、ミサを執り行なえても、

秘蹟をただで与えることは稀だろう。

上への審査を受けようとするなら、

小馬をそこへ連れて行かねばならぬ。

最初の者はワインと去勢した雄鶏を、

80

二人目は豚、三人目は雌鶏

四人目は30ロート<sup>(5)</sup>の銀杯、

五人目は美しい亜麻布を持って来る。

六人目は一組の美しいナイフ、

七人目は指輪、——それはかなり良い品だった。

85

八人目は馬を手で引いて来る。

九人目は何も持ってこない。——これではどうにもならぬ。

今やソロモンの英知を持っていようと、

贈り物をしなければどうにもならず、

ユダヤ人の魂のように救われないだろう。

90

阿呆であろうと馬鹿であろうと、

贈り物が一切を丸く収める。

間違っていようと、正しいことになるだろう。

贈り物がなければ私の馬は走らないし、

何ももらわなければ一步も進まないだろう。

95

ああ汝、哀れなキリスト教徒よ、

受ける損害のなんと大きいことか。

贈り物で役職が与えられるとは。

一人残らず絞首台に行くがいい。

## 注

- (1) この章は、収賄の額によって功労があっても冷遇されることへの批判である。  
 (2) 諺で、ある事柄や用件を早く解決するためには、贈り物や他の手段を用いること。  
 (3) 使徒言行録8, 18。  
 (4) 贈賄をする意。  
 (5) 1 ロートは約17グラム。

第四十三章<sup>(1)</sup> 荷車に油を差すこと<sup>(2)</sup>

今誰かが零落しそうになると、

世間の人々は、行きつくところへ行くまでとことん手助けし、  
 その人の荷車が速度を増すように、  
 みんなが油を差してやる。

犬にはとても悪い性質があって、

一匹がひどく噛まれ、  
 倒れそうになって吠えと、  
 ほかの犬たちがいっせいにその犬に噛みつく。

5 世間のおしゃべりも同様で、

誰かがある人のことを中傷すると、  
 別の人と言う。「それは本当だ。  
 私はそのことを以前から知っていた。

その上あいつは教会にも押し入ったし、  
 10 森で女を一人刺し殺した。」

一人目がその人についてたったひとこと言うと、  
 二人目はもう人殺しだと言う。

この世の中がこんなに軽薄で、  
 聞いたことに尾ひれを付けて話すなんて、

15 嘆かわしいことではないか。

お前はその前に、なにが、

どのように、いつ、どこで、誰が、と聞くこともできるだろうし、  
それは本当の話か、と尋ねることもできるんじゃないのか。

ひょっとしたらその人は中傷されているのかもしれない。

20           それなのにお前は どうして、お前を苦しめたことなど  
              一度もなかった人に罪をかぶせて、

そうやすやすと嘘をつき、

              その人の良い評判を傷つけたりするんだ。

今荷車に油が差され、

25           阿呆どもが荷車のところへ連れて来られても、  
連中は車軸油をほしがる必要などない。

              荷車はそんなことをしなくたってどうせ進んでいく。

車軸がゆがんでいたら、それをまっすぐにしてやるべきだし、

              車が倒れかかったら、起こしてやるべきじゃないのか。

30           それなのにお前は とても不誠実な人間だから、  
              率先して荷車に油を差してやる。

今やある人が零落して、

              健康を害し、財産をなくしてしまうと、

その気の毒な人は支払いができないから、

35           すぐにその人のものが差し押さえられる。

              なぜお前はそんなことを真っ先にやったんだ。

差し押さえのことを聞いた人は、

              自分もやろうとする。

そうすると債権者が大ぜいやって来て、

40           みんなが大急ぎで、

是が非でも返済してもらおうとする。

              荷車が倒れたら、

もう決して起きあがることはできない。

              もしその人に猶予が与えられていたら、

45           その人は名誉を保てたであろうし、

              負債から解放されたことだろう。

- ところがその人は国から追放されてしまったのだ。  
荷車が走り出しそうになったら、  
誰もが油を差すべきだ、とお前たちは言う。
- 50 今や荷車はあまりにも遠くに走って行ってしまい、  
お前たちがもう決して支払いを期待できないほどだ。  
そして誰もが一番目になりたがったので、  
お前たちは自分たち自身もあの人も破滅させてしまった。  
それはまったく利益にならない、と私は思う。
- 55 それに関して私は一つの称賛に値する町を知っている。  
そこでは、  
債権者はみないっしょに、  
共同で差し押さえをしなければならず、  
最初の人と最後の方は  
60 同じだけもらえる。  
こうして、さもなければ破滅せざるをえない  
多くの人々が立ち直っている。  
荷車が進んでいかなければならないようにしてしまったのは、  
悪い世の中で、
- 65 多くの実直な人たちを悪事へと強制し、  
しばしば絞首台まで連れて行く。

## 注

- (1) この章は、苦しんでいる人たちをさらに苦しめる人々を批判している。  
(2) 原文は den karren schmieren で、「自分自身の破滅、あるいは他人の破滅のために一生懸命になる」の意。

第四十四章<sup>(1)</sup> 猫を被った淑やかさ<sup>(2)</sup>

とかく女という奴は上辺<sup>うわべ</sup>ばかりは淑やかだが、  
股に木の実を挟んだら、



雅びな技を知っていて  
尻でそれらを砕くほど。

はてさて、女どもよ、  
お前たちが納得ずくで  
私の許に来るように、  
どれほど私は説得したことか。

5 それにしても上手く上辺を飾ったものだなあ。

遠路はるばるやって来て  
私のお被いを受ける羽目となり、  
その華奢な脚には迷惑をかけた。

家に居たとき毎日の

10 化粧をしたり、祭りの折りの身仕舞いに  
用いていたあの化粧箱、  
持参しようとお前は考えていたのだろうか。

お前が顎には白粉を、  
そして頬には薄紅差したりと、

15 <sup>めか</sup>粧して出掛けようなど思っても、  
その化粧箱は閉じられて家に置かれたままなのだ。

身体を灰汁で磨きあげ  
絹の褥に腰掛けて  
顔の化粧が崩れていぬか、

20 お前は鏡の自分が見たかろう。

胸を絹の小布で飾ったら  
身を売る準備はできあがる。

首筋すっきり洗い上げ  
強い灰汁で擦ったら、

25 指二つほどの幅しか無い  
絹スカーフをお前は首に巻く。

私が下に着ている物は

- これ以下は無いというひどい物。  
私の衣裳は袖の前後と真ん中が  
30 切れて開いているけれど、  
いか程袖が開こうと  
あの子がそこに縫いつけた  
亜麻の綺麗な布だけが他人様ひとさまの目に触れるのみ。  
あの子の肌着はばんじ清らかだとばかり  
35 私は思っていたのだが、  
その清らかさも見てくれだけの端切れ布、  
清纯と言ってもたかだかそんな事だった。  
さて、あの子が金のリングを指に嵌め、  
胸に一物、市場に出掛けて行って言う事は、  
40 「どんな魚が良いかしら」だ。  
そして指輪が他人様ひとさまの目に触れるよう、  
ああでもない、こうでもないと物色する。  
豊かに開く長マントを  
優雅な身振りで跳ね上げるのも、  
45 重ね着している衣裳をば  
みなに見せ付けようの魂胆だ。  
「私ってどうかしら」と、我々の  
説教椅子を運ぶ下女に聞く。  
「後に回って見て頂戴。  
50 貴族の奥方といっても良さそうね。  
脚も可愛く白いでしょ。  
私って品があって清楚だから  
粗布の服じゃあ堪らない。  
それで絹の服しか着ないのよ。  
55 教会に貧しい人が来るのじゃあないか  
あなた、見てきて下さらない。  
もし来るようなら私は行くのを止めとくわ。

貧しい女と同席するのは嫌いな<sup>ひと</sup>の。」

出席可能となったなら、

60 尻と頭で調子を取って

しゃなりしゃなりと気取った風で歩いて行き、

独り離れて席を取る。

「綺麗に飾って、教会に来たけど見えないの」と、

まるでそう言いたげなその風情。

65 侮蔑の言葉を言葉にもせず押さえるのも、

おのれが衆目を浴びていると思えばこそ。

そして小さな歯をきゅっと噛みしめる。

私は女にこう言いたい。「この阿呆めが、  
その見栄っ張りは、何時になったら直るのか。

70 お前なぞはくたばってしまうが良い。

お前は他の人々と変わり無く、

一皮むけば心の内は穢<sup>けが</sup>れ果て、

見かけが淑やかというだけだ。

じぶんをこうも汚辱にまみれさせ、

75 しかも貧者に立ち交わるを恥として、

上辺ばかり上品さを装うとは何事だ。

私はお前に諫言する。そんな行状は改めよ。

さもない時は手酷い報いを与えるぞ。

もし私の諫言を容れぬなら

80 お前の阿呆を被はにゃあならぬ。

たとえお前が綺麗でも私は手心を加えない。

お前の脚が白くても

私は少しも気に掛けぬ。ひととき過ぎればその脚も

地に朽ち果てて終わるゆえ」と。

85 女の虚栄はきりが無い。

女が大勢集まれば、

男をカモにしようとして、

- 色三昧に浮き身を<sup>やつ</sup>寢し、  
 めいめい化粧で飾り立て、  
 90 まるで謝肉祭の張りぼてだ。  
 美々しい衣裳が無かったら、  
 あの子に心を惹かれたかどうか分からない。  
 衣裳に<sup>こだ</sup>拘泥わるつもりなら  
<sup>こあきうど</sup>小商人の所にだって山とある。
- 95 衣裳が見たくばそこに行き、謝肉祭の踊りなど  
 はなから覗こうとはしないだろう。  
 されば女どもよ覚えておくがよい、もし貞淑さが無かったら  
 お前たちには何の取り柄も無いことを。

## 注

- (1) この章では上辺ばかりを飾り、虚栄心に駆られる女たちを糾弾する。  
 (2) 原文では katzenrein, 猫が綺麗好きであるところから“清潔な, 綺麗な, 端正な, 上品な, 淑やかな”等の意味に用いられる。元来猫がおとなしい外見ながら実は猛々しい性質の動物であることからの連想で, 上辺と内実とが異なる女に対して批判がなされたのである。

第四十五章<sup>(1)</sup> うわべを取り繕<sup>つくろ</sup>うこと<sup>(2)</sup>

- 厄介な事をうわべだけしか処理せず、  
 その下に何があるかを見ない者は  
 思いも及ばなかった  
 隠れた利益を見出すものだとか<sup>(3)</sup>。
- 売女ややくざ者と交わりながら  
 立派な人間として尊敬されたいと思い、  
 御立派なところを吹聴するような手合いを  
 うわべを取り繕う者、と私は言うのだ。
- 5 そんな連中はうわべがまともなだけで、

- 中身が見えるものならば、  
立派な血など流れちゃおるまい。  
下は安いのに上は高価、  
外は水でも内側は火。
- 10 まこと日の光にきらりと輝くものが  
全て金とはいかぬもの。  
自分の未熟なかわいい子供を  
通り一片に叱るだけで、  
打ったり、たたいたりせぬ者は
- 15 うわべで済まそうとしているのだ。  
悪事をはたらくのを見ながら、  
こう言うのだ。「なあ息子よ。  
どうして悪さなどしたんだい。」  
神様なら罰を与えずにはおくまい。
- 20 主なる神のみもとへ行くまでは  
子供に罰を免じるようなことをしてはならぬ。  
神に罰せられることのないように、  
この世で子供たちを罰しておけ。  
神があので罰をくだされるときは
- 25 厳しい鞭を使われると言うではないか。  
みるからにひどいさまを目にしながら、  
なぜ「なあ子供たちよ」などと甘い言葉で語りかけ、  
うわべだけで済まそうとするのだ。  
問題のあるところを見据え、
- 30 その裏に隠れているものを見抜いて初めて  
子供達の頭をすっかりだめにしている  
原因が見つかるのだぞ。  
おまえはうわべを体裁よく櫛でとかすように取り繕い、  
底にあるものを見ていないが、
- 35 根っこが残っていれば、

- 病気はやがてまたぶりかえしてしまうものなのだ。  
 臭いものは徹底的に取り除き、  
 穀潰し<sup>こくつぶ</sup>は自分の家から叩き出せ。  
 おまえに従おうとせぬようでは、  
 40 必ずや刑吏の後に従い、  
 縛り首になるのが落ちだろう。  
 それがろくでなしどもの受ける報いというものだ。  
 こういったことの多くは、子供に甘過ぎた  
 親の方に責任があるのだ。  
 45 子供が人殺しをしでかしても、  
 ただ一言叱るだけ。  
 親子の恩愛に目が曇り、  
 己れも我が子もだめにする。  
 エリ<sup>(4)</sup>が息子の犯した  
 50 悪行を罰することなく  
 大目に見たために、  
 その身に起ったように。  
 説教者どもも慈悲深くなり過ぎ、  
 かつまた神様がいかに恵み深く、  
 55 人間に対してかたじけなくも  
 大いなる慈悲と恩寵を垂れ給うかに言葉を費やすのは、  
 うわべだけで済まそうということなのだ。  
 櫛が上っ面を滑るだけ。  
 では神の正義はどこにいったのか。  
 60 これについて説教者はあまり多くを語らない。  
 神の罰、最後の審判はどこにいったのか。  
 これについても語られることは稀<sup>まれ</sup>で  
 そういふ説教のやり方は御免だ、というばかり。  
 そんなことをやっても実入りが無いというわけだ。  
 65 今の世すべてはかくも悪しきもの。

さればこそ罰などもはや人の気に入らぬのだ。

### 注

- (1) この章は不適切な寛容に対する批判である。
- (2) 原文は In dem grindt lusen で、grindt は「頭の皮膚病」で、古くは広く蔓延していたようである。lusen は「蝨（しらみ）を取る」。in dem/im grindt lusen はこの他に冒頭の四行文の第一行、本文の第一行（訳文第四行）、第十二行（訳文第十五行）、第二十八行、第五十三行（訳文第五十七行）に出てくる。その意味は「病巣はその下にあるのに、それには手をつけず、ごく簡単に表面だけを蝨でも取るようにきれいにする」転じて「本気で叱らない」といったところであろう。
- (3) 勿論、皮肉である。
- (4) 旧約聖書、サムエル記上 2-4 章を参照。

エリはシロにある神殿の祭司であり、二人の息子がいた。彼らも祭司であったが、素行が良くなかった。エリは彼らを諭したが、言うことを聞かなかった。神はエリが「自分の息子をわたしよりも大事にし」、「息子たちが神を汚す行為をしていると知っていながら、とがめなかった」として、二人の息子をペリシテ人との戦いで死なせた。彼らの死んだこと、神の箱が敵に奪われたことを聞いてエリも死んだ。

## 第四十六章<sup>(1)</sup> 災いを呼び起こすこと<sup>(2)</sup>

多くの悪人どもは  
 みんなを破滅させ、  
 ひとりひとりを辱め、悪口を言い、  
 世界中に災いを呼び起こすことに喜びを感じている。

災いを呼ぶ人たちもやってきた。  
 お前たち誠実な人よ、ここへようこそ。  
 悪魔がお前たちをここへ送ってよこしたのか。  
 お前たちが来ると、ろくなことが起こらない。

- 5 年老いた女たちがあまりにも分別をなくし、  
 心に大きな復讐心を抱いているために、

- 悲しみや苦しみを  
　　国中にもたらし、  
災いを呼び起こし、
- 10　　ぶどうと穀物を台なしにし、  
すべての実りがだめになるなんて  
　　考えてもみてくれ、不思議ではないか。  
年老いた女たちは悲しみを引き起こし、  
　　こうして富める者も貧しき者も破滅させることに
- 15　　大きな喜びを感じるので。  
　　ああ、残念だ。そのような復讐心が人間の中にあることを  
神が哀れみますように。  
　　今、私たちの時代はそのような人間たちを抱えているのだ。  
ああ神様、ああ神様、私の願いを聞き届けてください。
- 20　　なぜ大地が年老いた女たちを飲み込んでしまわないのでしょ  
　　う、その悪女たちはあなたを否定し、  
　　悪魔に<sup>くみ</sup>与し、  
悪魔に身も心も捧げているというのに。  
　　ああ、性悪な年寄り女め、
- 25　　お前の母親は草葉の陰で呪われよ、  
　　そしてお前がこの世に生まれた  
不吉な時間も呪われよ。  
　　いつも嘘をつく  
　　悪魔の策略がわからないのか。
- 30　　なぜお前はこんなに分別をなくし、  
　　雷雨やあられや雪を降らせ、  
子供の手足を萎えさせ、おまけに  
　　香油を塗った棒にまたがって飛べるなどと  
思いこんでいるのか。
- 35　　お前の行為をこれ以上見逃しておくわけにはいかない。  
さあ、火の中へ入って燃えてしまえ。



たとえ刑吏が見つからなくても、  
お前に逃げられるくらいなら、  
私が自分で火をつけてやる。

40 正義の戦いをせずに、

雷やあられが落ちるのを望み、  
誰もがただ破滅して、  
町や村が焼かれ、

教会が襲われ、

45 人も国もめちゃくちゃにされるのを  
喜ぶ者、

大きな争いを引き起こすことができ、  
一時間に十二の殺人を犯すことができ、  
わらぶき屋根の家に火をつけて

50 空を煙でいっぱいにする者、

ひどい災いを引き起こしているのはまさにそういう輩だ。  
アレキサンダー大王がやったように、  
ハンニバルとフランス王<sup>(3)</sup>が  
イタリアでやったように。

55 この者たちはその人々に対して災いを呼び起こした。

隣人に復讐しようと思う者、

多くの苦痛と苦悩、

争いと敵対を引き起こす者は

自分に災いを招くことになる。

60 そやつが他人に与えた仕打ちは

神も忘れてはおらず、

その後神はちゃんと罰をお与えになる。

人に害を与えることができなくても

人の不幸を望み、

65 他人の没落を喜ぶ人は多くいる。

こうした輩すべてを災いを呼び起こす者と言うのだ。

## 注

- (1) この章は他人に災いをもたらし、それを喜ぶ人への批判である。  
 (2) 原文は Ein hagel sieden。魔女のような特別な人間があらゆる悪天候を作り出すという迷信から生じた表現である。  
 (3) このフランス王については、1494～5年にイタリアへ侵入したシャルル8世が考えられる。

第四十七章<sup>(1)</sup> 鍋を火にかけること<sup>(2)</sup>

まっとうな女は、男の仕事が  
 　　うまくいくよう手助けするするものだが、  
 悪女は当の男ばかりか、  
 　　自分の身も滅ぼして恥をさらす。

賢者のなかにもヴィーナス<sup>(3)</sup>の綱に縛られて、  
 　　<sup>とりこ</sup>虜にされた者がいる。

ヴィーナスに縛られた人はがんじがらめになり、  
 　　その綱を断ち切れたことはない。

- 5 デリラはサムソンを捕らえた、<sup>(4)</sup>  
 　　サムソンは二度もうまくやり過ごしたのに、  
 三度目には本当にひっかかって、  
 　　自分の体と髪を犠牲にした。

- 王様、皇帝、領主、お偉方が  
 10 悪女にこけにされている。  
 あの連中は、出家していようと、いまいと、  
 　　雨が降ろうと、槍が降ろうと、  
 悪女を帯同していて、  
 　　その理由というのが僧坊を掃き清めるためだ。

- 15 鍋が火にかかっていると  
 　　本当にちっとも眠れない。  
 かまどではどれくらい煮えているか、

- 火は後どれくらいもつかと、  
鍋に目を向けていないと
- 20 落ち着かず、気がやすまらない。  
坊主がヴィーナスの綱に縛られると、  
聖職の身分にあることを忘れ、  
夜間壁を乗り越えて外へ出る。  
また、女を家に連れ込もうとする。
- 25 カルトジオ修道会士<sup>(5)</sup>ですら愛の虜になるや否や、  
すぐに教団を離れる。  
聖職者が女のことを考えないのは  
年中女のそばにいられるようになったときだけだ。  
世間には女なら誰でもいいという奴もいるが、
- 30 聖職者はとりわけ特定の女だけが好きだ。  
やがてその女が重荷になるとしても、  
その重さは苦にならない。  
鍋が火にかけられて、  
女が包丁を研いでくれたら、
- 35 それでもものを切り、走って行って、  
花一輪を貰ったかわりにコートを買ってやらねばならぬ。  
私は昔パリまで行った、  
そこであの娘の白い足を思い出した、  
そこで私はすぐに戻ってきて、
- 40 尋ねた、お前はまだ心変わりしていないか、  
まだあの赤い靴<sup>(6)</sup>をはいてるか、と。  
すると女は鍋を火にかけた。  
私はパリで学問に精進すべきだったが、  
女に入れ揚げた。
- 45 いま私がこれら一切合切を話す意図はこうなのだ、  
まっとうな女たるもの、ある男が我を忘れ、  
自分の名誉も忘れ、

- 阿呆のように走り回るほど  
惚れ込んだと
- 50 気づいたら、  
当の女は男よりも冷静になり、  
火に油を注ぐ様なことをせず、  
鍋を火から降ろすべきだ。  
私は本当に知っているのだ、
- 55 火で鍋が熱くなると、  
縛っても、投獄しても効果がなく、  
行きつくところまで行くことになることを。  
まっとうな女は、一人の男の心を  
虜にしたと気づいたら、
- 60 男が、この世でも、あの世でも、  
自分の為にならぬ、気違いめいた生活をおくるのを助長するべきではない、  
そのためには刃傷ざたも起こるのだ。  
しかし世の中には、阿呆を縛りあげ、
- 65 全くの痴れ者となるのを、  
喜ぶ女が多々いるものだ。

(受理日 平成12年12月18日)

#### 注

- (1) この章は、道ならぬ恋におちた聖職者にたいする批判である。
- (2) 原意「鍋を火にかける」は転じて「情欲を燃え上がらせる」の意。
- (3) ローマ神話の愛と美の女神。中世キリスト教では聖母マリアとは対照的に、愛欲の権現とみなされた。
- (4) 旧約聖書、士師記16、4-21参照。なお、聖書では、サムソンはデリラの罠を三度逃れたが、四度目ではまった。
- (5) ブルーノ・フォン・ケルン(1032-1101)によって設立された修道会の会士。この会は完全沈黙、一日一食、肉食禁止等隠修士的性格の厳しい戒律をもつ。
- (6) 「赤い靴」には当時高級品のイメージがあった。